

# バドミンントンの競技規則の改訂ならびに技術と戦術の 変遷に関する基礎的研究

岸 一弘

## キーワード

バドミントン 発展史 競技規則 技術 戦術 教材開発

## 要旨

本研究の目的は、教科体育における教材開発とバドミンントンの初心者指導に関わる基礎的資料を得ることである。本稿では、国際バドミントン連盟（International Badminton Federation=IBF）が設立された1934年以降の文献をもとにして、ルール改訂とそれに密接な関連があると考えられる技術と戦術の変遷に視点をあてた。IBFが1939年に改訂した『Laws of Badminton』には、全21条と新たに注釈が4項目記載されていた。それは、IBFが設立された1934年に制定された『Laws of Badminton』をさらに検討したもので、現在のルールの基盤となっている。バドミンントンの技術は、基礎技術と応用技術並びに試合技術に大別できる。なかでも、近代バドミントンが成立してから受け継がれてきた‘攻撃的でない’アンダーハンド・サービスは、伝承しなければならない技術といえる。ダブルスの戦術としての4つのフォーメーション（sides, front and back, diagonal, rotation）は、1950年代の文献で紹介されていた。今後は、バドミンントンの技術と戦術に関する膨大な史料の検討と分析を行い、教材開発や初心者指導に活かせる資料を提供したい。

## I はじめに

バドミントンは、ミュンヘンオリンピック大会（1972年）並びにソウルオリンピック大会（1988年）で公開競技となった。その後、1992年のバルセロナオリンピックからは正式種目となり、男・女のシングルスとダブルス及びミックス（男女混合）ダブルスが行われている。ロンドンオリンピック大会（2012年）の女子ダブルスにおいては、日本の藤井瑞貴選手と垣岩令佳選手組が史上初の銀メダルを獲得した。日本女子選手の活躍は、古くは1960年代から70年代までのユーバーカップ（世界国別女子団体戦）における3連覇を含む5回の優勝をはじめとして、個人でも中山（高木）紀子選手や新沼（湯木）博江選手らが世

界チャンピオンに輝いている。また、北京オリンピックでの末綱聡子選手・前田美順選手組のベスト4と小椋久美子選手・潮田玲子選手組のベスト8が記憶に新しい。近年では、2014年5月にインドで行われたトマスカップ（世界国別男子団体戦）における初優勝とユーバーカップ準優勝、及び2015年5月に中国で行われたスデイルマンカップ（世界国別男女混合団体戦）では、史上最高の準優勝に日本チームが輝いている。

このように、わが国のバドミントンは国際大会で優勝が狙えるレベルになってきたため、2016年開催予定のリオデジャネイロオリンピック・パラリンピック大会並びに2020年開催予定の東京オリンピック・パラリンピック大会では、メダル獲得の期待がかかる種目といえる。ただ、競技力向上や競技者人口増加の観点からいえば、バドミントンを子供たちが今後行ってみたいと上位に上げるような環境整備等も急務と考えられる。また小学校体育科においては、中学校保健体育科の運動領域「球技」として初出するラケット系スポーツ（バドミントン、卓球、テニス）に繋がるようなバリエーションに富んだ運動の体系化、特に調整力を高める要素やラケットとボール（シャトルを含む）の位置関係などを感覚的に捉えられる力の獲得を目指す基礎的・基本的な運動の教材開発が待たれるところである。

ここで、競技規則の改訂（変遷）や技術および戦術に関する発展史が教科体育の教材開発や初心者指導に有用な資料となり得る理由を述べておく。K. マイネル（1982, p. 9）は「このこと<sup>注1)</sup>は、個人の運動系発達のなかでも、苦勞して試行錯誤していくのを省かせるものである。人間は先人たちの運動系の経験財に支えられて生きているのである。人間はその財産を自分のものにするには、確かに自分で習得しなければならないけれども、極めて短縮された経験道程において習得できるのである。—（以下略）—」及び「スポーツ技術の歴史は書き残しておくのに値するものである。というのは、その歴史というものが今日における“現代”の技術をよりよく理解するのに著しく貢献するからである。とりわけ、この技術史は多くの紆余曲折を経ながらも、運動をより合目的に、経済的にさばく傾向が支配的であることを明確に認識させてくれる。」（同, pp. 31-58）と記している。もう1つは阿部（1984, p. 280）が「バドミントンの歴史的発展がバドミントンの個人的な上達過程によく一致する。」と記している。これらは、いわば“個体発生は系統発生を短縮されたかたちで繰り返す”というヘッケルの反復説（織田ほか, 1976, pp. 239-240）に例えられよう。つまり、体育授業での学習者やバドミントンの初心者が新しい運動を習得するにあたっては、先人が歩んできた技術や戦術の発展過程を辿って練習（学習）することが、上達の早道だと筆者も考えているからである。

本論では、世界バドミントン連盟（IBFは、2006年に世界バドミントン連盟=Badminton World Federationと改称した）が規定している競技規則の改訂とそれに密接な関連があると考えられるバドミントンの技術および戦術の変遷に視点をあてる。ただし原則として、IBFが設立された1934年以降の文献を調査対象にする。また、原則として1934年以降のバドミントンを「近代バドミントン」と表記する。関連文献の分析から、教科体育に関わる教材開発やバドミントンの初心者指導のための基礎的資料を得ることが研究目的である。

## II バドミントンの競技規則の改訂について

近代バドミントンの競技規則は、1893年に英国でバドミントン協会 (The Badminton Association) が結成された以降 (1898~1901年) のオフィシャルルールが基になっていて、そのほとんどが現行規則に近いものであった (蘭, 2010)。このことを踏まえた上で、1934年にIBFが設立された後、IBFから年次的に発行されてきた『Handbook』に着目する。

まず、イングランドバドミントン協会 (Badminton Association of England=BAE) によって発行されていた『Laws of Badminton』 (IBF, 1939) についてみると、そこには全21条と新たに注釈 (INTERPRETATIONS) が4項目記載されている。条文の詳細をみると第1条がコート (COURT)、第2条が支柱 (POSTS)、第3条がネット (NET)、第4条がシャトル (SHUTTLE) や第14条がフォールト (FAULTS) 及び第15条~21条には一般規則 (GENERAL) などが規定されている。それはIBFが設立されたと同時に制定されたルール『Laws of Badminton』をさらに検討したもので、現在の競技規則の基本が確立されたものと考えられる (高橋・今井, 2002)。

その後、『Handbook』 (1950年) と『Recommendations to Umpires, the Laws of Badminton』 (1954年) が同じくIBFから発行されている。1949年及び1952年改訂の『Laws of Badminton』で特筆すべき点は、シャトルに関する規則に追加がなされたことである。すなわち、同年に「合成シャトル」の作製に成功したため、それを必要とする国々では国内協会の承認があれば使用しても良いというものであった。ただし、対象となったのはプラスチックシャトルのみであった (阿部, 1987, p. 1000)。

『Laws of Badminton』 (1939年改訂版) 第17条には、「レット」 (やり直し) に関する次のような2つの規定があった。「もしサービスでシャトルがネットに触れて、サービスコート内に入れば、それは“レット”である」。「もし、サービスあるいはラリー中に、シャトルがネットの上を通過した後で、ネット上に留まるか引かかった状態になれば、それは“レット”である」 (筆者訳)。けれども、1958年にはサービスにおける「レット」が廃止された。この改訂自体は極めて小さいものであったが、試合方法には驚くほど大きな変化を与えた。それらによって、サービスの際にシャトルがネットコードに接触したか否かを確認する必要がなくなり、アンパイアなしで行われるゲームの不快さを避けることが出来るようになったからである (阿部, 1987, p. 1000)。

IBFの年次総会 (1963年) では、1939年の改訂版<第14条(h)及びINTERPRETATIONS. 2. (d)>で「フォールト」に判定されることになったウッドショットに関する規定が見直され、再びセーフとなった。これは今日でいうフレームショットのことである。1963年に改訂された『Laws of Badminton』第14条(k)の後段をみると、「シャトルがラケットのフレームやシャフトまたはハンドルで打たれたとき、あるいは、シャトルのコルク台と羽根の部分が同時に打たれたとき、それは違反ではない。」 (筆者訳) とある。

2002年の改訂では、女子ダブルス (WD) と混合ダブルス (XD) が従来の15点制から

11点3ゲームマッチになった(高橋・今井, 2002, p. 168-169)。また2006年には「サイドアウトスコアリングシステム」から「ラリーポイントスコアリングシステム」となり、全ての種目が21点3ゲームマッチに変更された(IBF, 2006; Brahm, 2010, p. 128)。同時に、これまで第3ゲーム(ファイナルゲーム)になった場合のみに第2ゲーム終了から5分以内の休憩(インターバル)が与えられていたのが、いずれかのサイドが11点に達した場合に60秒間の休憩と第1ゲームと第2ゲームの間並びに第2ゲームと第3ゲームの間にそれぞれ120秒間の休憩が取れ、しかもその間においてはコーチからの助言が認められるようになった。一方で、セティングに替わって20点オールから先は2点リードしたサイドが勝つようになった。ただし、最長でも30点で終了するため、従前に比べるとゲーム時間の短縮が見込まれる。これらの改訂の背景には、身体への負荷の軽減が望めることはもちろんだが、いちばんにはテレビ放送を意識したものがあつたと考えられる。すなわち、従前に比べて1ゲームあたりの試合時間がおよそ見越せるようになることやインターバル時(60秒間並びに120秒間)にコマーシャルの放映時間が確保できる等の理由が挙げられる。

### Ⅲ バドミントンの技術の変遷

図1は、バドミントンの技術の仕組みについて、参考文献を基にまとめたものである。バドミントンの技術は、試合(ゲーム)で使えるようにするために習得するのが究極の目的といえる。それは、構え(スタンス)などの「基礎技術」とサービスリターンなどの「応用技術」並びに戦術や作戦といった「試合技術」に大別できると考えられる。

#### 1. 基礎技術に関して

##### (1) グリップに関する専門書及び教本等での表記

ラケットの握り部分をハンドル(Handle)またはグリップ(Grip)ということもあるが、本論ではラケットの握り方をグリップとする。表1は、バドミントンのグリップに関する名称を専門書や教本等から抽出して、まとめたものである。

バドミントンのグリップの名称は、テニスからの影響が大きいと考えられる。近代バドミントンが英国で生まれたにもかかわらず、「イングリッシュ・グリップ」という名称は堺(1982)と関ら(1989)しか使っていない。これは米国経由で我が国にバドミントンが移入されたことに関連があるかもしれない。「シェークハンド・グリップ」という名称は、卓球ラケットの握り方の主要な名称のひとつでもある。バドミントンでは、伊藤ら(1964)ほか9例(伊藤;1969, 角田;1975, 関;1979, 小島;1980, 花岡;1982, 梅野尾;1984, 田郷;1984, 池田;1984, 大世古;1988)と銭谷(1987, 1990)だけであった。日本で最初に「リストスタンド」と「サムアップ」をバドミントン本に示したのは、前者が阿部と岡本(1985)、後者が阿部と渡辺(1985)ではないかと推測される。ただ、それよりも以前に「Thumb-up backhand

表1 バドミントンのグリップの表記

国内著書	握り方を示す表記	海外著書	握り方を示す表記
伊藤ら(1964)伊藤(1969)角田(1975)関(1979)小島(1980)花岡(1982)梶野尾(1984)田郷(1984)池田(1984)大世古(1988)	ウエスタン・グリップ, イースタン・グリップ(シェークハンド・グリップ)	Davidson & Gustavson (1965)	Forehand grip Backhand grip (Thumb-up backhand grip)
塚(1982)	ウエスタン・グリップ, イースタン・グリップ, イングリッシュ・グリップ	Brown(1971)	Forehand grip Backhand grip Panhandle or Frying-pan grip
相沢(1983)	ウエスタン・グリップ, イースタン・グリップ, ハーフ・グリップ	Crossley (1973)	フォアハンド・グリップ, バックハンド・グリップ, フライパン・グリップ (ウエスタン・グリップ)
阿部・岡本(1985), 阿部・渡辺(1985), 岸(2010)	フォアハンド・グリップ, バックハンド・グリップ, * リストスタンド, サムアップ	Davis(1976)	Forehand grip, Backhand grip, Frying-pan grip
阿部(1986)	ウエスタン・グリップ, イースタン・グリップ, * リストスタンド	Hashman & Jones(1977)	forehand grip backhand grip
関根・平川(1986)	フォアハンド・グリップ, バックハンド・グリップ	Meyners(1983)	Vorhandgriff, Rückhandgriff
銭谷(1987)(1990)	シェイクハンド・グリップ, バックハンド・グリップ, ウエスタン・グリップ, * サムアップ, リストスタンド	彭美丽等(2001)肖杰等(2008)	フォアハンド・グリップ, バックハンド・グリップ
関ら(1989)	ウエスタン・グリップ, イースタン・グリップ, イングリッシュ・グリップ(コンチネンタル), サムアップ・グリップ	Downey(1978)(1990)	forehand grip, backhand grip, multi-purpose grip
平川・胡(1994)	フォアハンド・グリップ, バックハンド・グリップ, * 親指を立てる	中国ジュニアBD訓練教材編集T(1998)	イースタン・グリップ<フォアハンド・グリップ, バックハンド・グリップ>
廣田・飯野(1994)	フォアハンド・グリップ, バックハンド・グリップ, * 親指をつける, リストスタンド	Grice(1996)(2008)	forehand grip <pistol or handshake grip >, Eastern forehand grip, thumb-up grip
廣田・飯野(2001)	バックハンド・グリップ, イースタン・グリップ, ウエスタン・グリップ(フライパン・グリップ) * 1つのグリップではすべてのストロークに対応できない。	Edwards(1997)	Forehand Grip, Backhand Grip, Pan Handle Grip, Multi-Purpose Grip, Short Grip
平川(2004)	イースタン・グリップ, バック・グリップ(ベース・グリップ), バック・サムアップ・グリップ(応用・グリップ), ネット前でのグリップ	Paup & Fernhall(2000)	Forehand Grip, Backhand Grip, Frying pan(or hammer) Grip
小島(2006)	イースタン・グリップ(フォアハンド, バックハンド) * サムアップ, リストコック	ラル夫・法彼西等(2008)	通用握拍法, 正手击球の正手握拍法, 反手击球の反手握拍法, 网前突击的握拍法
ウエンブレー・バドミントンチーム(2009)	イースタン・グリップ(フォアハンド), サムアップ・グリップ(バックハンド) * リストスタンド	Brahms(2010)	universal grip, short grip, long grip
池田(2011)	イースタン・グリップ, バックハンド・グリップ, ウエスタン・グリップ		
舩田(2011)	イースタン・グリップ(フォアハンド, バックハンド), ウエスタン・グリップ		

grip」を用いていたバドミントン本 (Davidson & Gustavson, 1964, p. 12) と「サム・アップ」を記したテニス本 (パレット, 1928, p. 30) がみられるため、さらに調査・検討が必要だと考えている。

近年に目を向けると Brahm (2010, pp. 21-23) は、「universal grip」と「short grip」及び「long grip」という、これまでに見られない名称を用いている。まず、「フライパングリップ frying pan grip」は初心者にみられる握り方だが、テニス肘と同様な障害を起こす可能性があるため望ましくないと述べている。そして、初心者のうちから正しいグリップを習得したほうが良いと説いている。正しいグリップとしては、「ユニバーサルグリップ」を推奨している。このグリップは万能なグリップだが、その変形 (バリエーション) として「ショートグリップ」と「ロンググリップ」を挙げている。前者は、ネット近くの「一打で決められる」ショットや「ドライブ」のように長いバックスイングを必要としない時に使われる。後者は、原則としてすべてのストロークで使われるが、「スマッシュ」に最適だと述べている。またエリートレベルの選手は、「ユニバーサルグリップ」のバリエーションを状況に合わせて行い、左または右に 30 度までラケットを回転させていると記している。

## (2) サービス (サーブ) に関して

サービス本来の意味は「奉仕」「世話」などといわれている。この精神、すなわちネット越しの対戦相手に向かって攻撃的でないアンダーハンド・サービスをおこなうことは、近代バドミントンが成立して以来続けられている。一時期、リバース・スピニング・サービスをおこなう選手が 1980 年代初頭に出現したが、たちまち禁止となった (阿部・渡辺, 2008)。ただし、IBF の競技規則ではサービス時の羽根打ちが禁止されているものの、スピンをかけてはいけないとはどこにも明記されていないため、この問題が完全に解決したわけでないとの指摘がある (高橋・今井, 2002, pp. 183-186)。しかしながら、近代バドミントンが成立してから受け継がれてきた「攻撃的でない」アンダーハンド・サービスは、これからも伝承しなければならない技術といえる。

ショート・サービス (諸外国の文献では low serve と表記されていることが多い) は、以前はフォアハンドで行い、ダブルスで用いることがほとんどであった。筆者が大学生の頃 (1970 年後半) も、大方がフォアハンドからのショート・サービスであったと記憶している。しかしながら、現在ではほとんどがバックハンドから行うものとなり、シングルスでも用いられている。特に、男子シングルスにおいては多用される傾向にある。では、いつ頃からバックハンドのショート・サービスが出現したのであろうか。それについては、1963 年の親善試合で来日したインドネシアの女子選手 (ミナルニ、レトノ、その他) がバックハンドのサービスをおこない、それ以後、日本でも一般的になったと記されている。また過去においては、日本の男子 (水谷選手) が唯一行ったことがあるらしい (兵藤, 1972, p. 631)。いずれについてもショートとは記されていないが、バックハンドのショート・サービスと推測される。

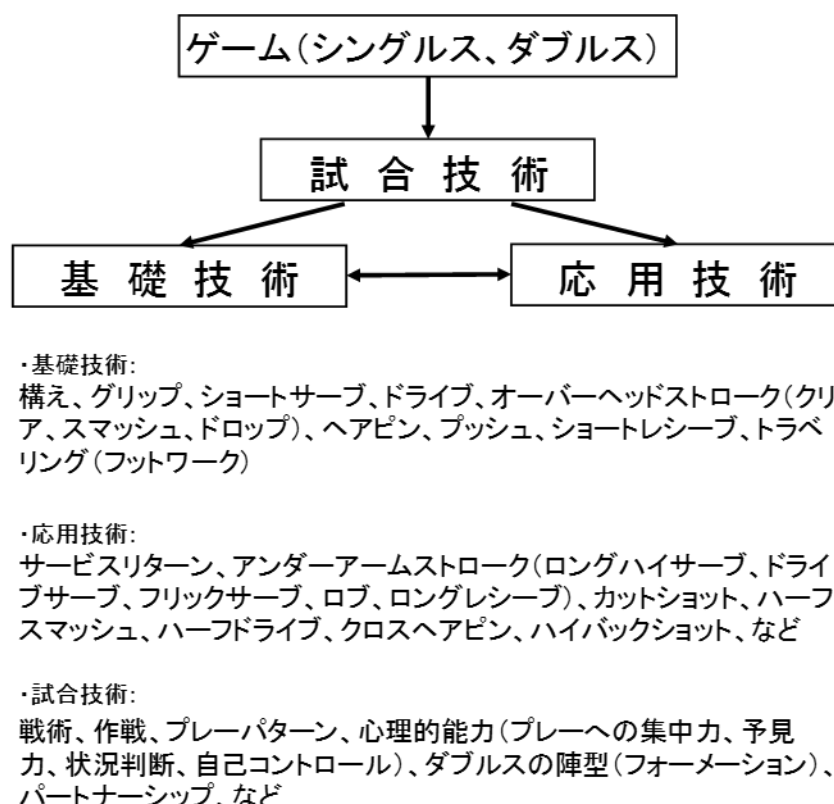


図1 バドミントンの技術の仕組み

(出典：『テニス指導教本』日本テニス協会編, 1998, p. 54 を参考に作成)

そこで、1963 年前後に出版された文献を調べることにした。前述のバドミントン本 (Davidson & Gustavson, 1964, p. 38) には、「low serve」がイラストで紹介されているが、フォアハンドのものであった。もっとも、当該本の初版が 1953 年なので、バックハンドからの「low serve」は説明されていなくても不自然ではない。一方、我が国で 1960 年代に出版された文献 (伊藤, 1969, p. 119) では、バックハンドからの写真 (インドネシアのタン・ヨー・ホッグ選手) が掲載されていた。コメントはバックハンド・サービスとなっているが、これは、おそらくバックハンドでのフリック・サービスのことだと考えられる。

### (3) ストロークとショットに関して

手元にある最古のバドミントン本の著者ジャクソンとスオン (1957, pp. 63-108) は、ストローク(羽根の打ち方)として①ドリブン・フライト (またはドライブ) ②クリヤー (またはロブ) ③スマッシュ④ドロップ⑤ネット・フライト (ヘアピン) を挙げている。これは、原著が手元にないので不明だが、訳者がストロークとしてしまった可能性も否めない。筆者ならば、ストロークよりもフライト (羽根の飛び方) またはショットと表記するだろう。これに対して、基本的なストロークには次のような 4 つの型があると記している。すなわち、シャトルが「自分の身体の右側から飛んできたときに使う」フォアハンド・スト

ローク、それとは反対の「左側から飛んできたとき」はバックハンド・ストローク、そして「頭の真ん前からまたは右肩の上方から落ちてくる」シャトルを「ラケットと腕を伸ばしきったリーチ」で打つオーバーヘッド・ストローク及び「ネットのすぐ間近に落ちてきた」シャトルを「リターンする」のに使うのがネット・ストロークだと記している。筆者はラケットでシャトルを打つ動作を「ストローク」、ストロークによって生み出されるシャトルの飛行（フライト）を「ショット」と定義している（岸, 2010, p. 10）。

次に、1920年代から80年代までの概要について、先行研究を引用して著すことにする。

1920年代のトマス選手やデブリン選手らは、既に攻守の基本的な形態を完成させていた。1950年代では、マラヤのスン選手がリストスタンドの効いた打法で新しいパワフルバドミントンへの道を開いた。同じく<エディクションジャンプ>で著名なマラヤのチョン選手は、持久力がバドミントンに欠くことができない要素であることを示したプレーヤーであった。そのチョン選手をパワーで粉砕したのはデンマークのコプス選手であり、彼のパワフルなストロークは、それらを軸にして生み出されるデシーブなショットに新しいスタイルを可能にした。とりわけ強力なバックハンド・ストロークは、その後のバックハンド技術の基本となった。コプス選手を破ったのは、ソネビル選手やホク選手らのインドネシア勢であった。彼らはパワーのバドミントンに速い動きが伴っていた。こうしたスピード化への傾向はマレーシアのハン選手を経て、インドネシアのハルトノ選手によって頂点に達した。さらに1980年代には、中国選手の台頭へと継承されていった。一方、この時期のダブルスは、デンマークのコベロ選手によって新たな幕開けを迎えた。その多彩なネット・ショット技術は、ネット際を制する者はダブルスを制するという原則を生み出した。しかし、こうした技巧を破ったのはマレーシアのタン選手とブンビー選手組のパワーであった。さらにこのパワーのダブルスは、スピードとテンポを主軸にして強力なスマッシュとドライブを用いて徹底したセンター攻撃をくり返すインドネシア勢に打ち破られてしまったのである（阿部, 1987, pp. 1000-1001）。

日本においては1938年頃、「ドリブン・フライト、ハイクリヤー、スマッシュが主で、ドロップ・ショットはおこなわれず、たんにネット近くに落とす程度のものであった。また、ヘアーピン・フライトが少々用いられたが、今日のものと比べものにならないもので、クロスはほとんど用いられず、たんなるヘアーピン・フライトであった。」1956年には、マラヤ及びフィリピンから2選手を招待して東京で親善試合が行われた。「彼らのリストでのスマッシュの強さ、スマッシュをコート中央でインターセプトして、リターンしてくるシャトルコックはバックライン近くまで戻ってくる。そのリストの強さに一同驚嘆するばかりであった。」1964年に第6回トマス杯インター・ゾーンが東京で行われ、「デンマークの誇るバックハンドをフォアハンドなみに使う、コプス選手、ダブルスにおける見事なラケットさばきのコベロ選手、フォアよりもコントロールの良いバックハンドのタイのチャロン選手—（中略）—、高打点からの正確なスマッシュとドロップのインドネシアのソネビル選手、バックハンド・サービスとネットからの素早いクロス・ドライブのインドネシ



アのホッグ選手たちに接し、大いに勉強になった」(兵藤, 1972, pp. 628-632)。1969年には、「ハイバックからの処理の完璧さで、湯木博江選手が全英チャンピオンになった。また、第5回ユーバー杯チャレンジ・ラウンドが東京で開催された。日本は初防衛に成功するとともに、バックハンドでの処理はほとんどの選手がスムーズに行えるようになり、特に追い込まれた時でも相手のバック・コートにリターンするだけの力が備わってきた」(兵藤, 1972, p. 634)。

以上のことから、1980年代までの日本男子においては、外国勢のバックハンド・ストロークやスマッシュ、ドロップ、クロス・ドライブなどのショット技術に引けを取るところが多々あり、国際大会での戦績は振るわなかった。しかし日本女子においては、1960年代後半からバックハンド・ストロークの技術を習得したことで世界との技術差はほとんどなくなったと考えられる。

#### IV バドミントンの戦術の変遷

ここでは、わが国において比較的初期に出版(翻訳)された書籍並びに近年出版された書籍を取り上げ、その概要について述べる。

##### 1. シングルスに関して

###### (1) 戦術(戦法)に関わる基本的な考え方

ジャクソンとスオン(1957, pp. 169-175)は、「普通のプレーヤー達がよく犯す誤り」として、4つ挙げている。それらは守備の心構え(戦術)と考えられ、次のように解釈できる。①フットワークを活かしてコート中央の定位置に素早く戻ること。②ストローク前後に身体のバランスを崩さないこと。③ラケットはスイングに備えて構えておくこと。④技術的な弱点が無いようにしておくこと。これに対して攻撃の戦術は、次のように解釈できる。①自分の意図を敵に悟られないこと。②ストロークの際、相手の目を欺くように努めること。③できるだけ低めに打ち、相手が打ち上げざるを得ないように仕向けること。④相手が予期しない地点を狙うように努めること。⑤ラリー中に相手の弱点を見つけ、そこを狙って打つこと⑥相手の守備位置を片寄せさせること。⑦相手のストローク力は、試合開始後できるだけ早くに見抜くこと。⑧相手が最大努力で届く場所に打ち返せば、体力も消耗させることができる。⑨相手をできるだけバックコートに釘づけにさせること。以上のことから、守備では隙をつくらないことが、相手に攻撃のチャンスを与えない戦術となるだろう。攻撃では相手の動きや技能レベルを試合開始後の早期に見極め、弱点を狙うように組み立てることが基本的戦術だと考えられる。

伊藤ら(1964, pp. 93-98)は、第7章作戦の要点と各種のストロークの「作戦上の3原則」として、①相手を前後に揺さぶること②相手を左右に揺さぶること③スピードの変化によ

る眩惑戦法を記している。そして、「前述の3原則の目安を基にして、相手からの攻撃的なストロークが送られてきた」場合、どのように防御または攻撃に転ずるかを明示している。防御するには、①相手からのフラインクの性質を早く見極めることと②相手の位置及び体勢を判断することを挙げている。①では、アンティシペーション（予見力）の重要性を説いている。②では、相手の位置及び体勢を判断することは難しいが、生の知覚、即ち経験知によってそれらは磨きがかかると説いているように考えられる。これに対して、攻撃をするうえでの位置と場所に関するものとして、試合中に「相手の得意ストロークがわかってきたら、そういうストロークを打つのに都合の良いコース」には返球しないことなど4点を挙げている。方向に関するものとしては、「常に事情の許す限り、下向きにシャトルを打ち込むようにする。」など4点を挙げている。さらに、スピード、コース、タイミングの変化に関するものとして、相手の動きの逆を攻めることや意表をつくようなショットを駆使するのもバドミントンらしい作戦だと説いている。これらのことから、上記の「作戦上の3原則」等は、初心者が覚えておくべき基本的理論とも捉えることができる。

ダビドソンとグスタフソン（1965, pp. 123-160）は、シングルスとダブルスの戦術について多くのページを割いて説明している。シングルスでは、①基本作戦②高い深いサーブ③適度の長さ④種々のサーブ⑤コート上の位置⑥思慮深いプレースメント⑦角度の研究⑧クロス・コート・ショット⑨アンダーハンドのネット・リターン⑩クロス・コート・ショットの功罪⑪スピードのコントロール⑫お決りの癖をさげよ⑬プレーの微妙な点⑭サーブに対するリターン⑮攻撃の変化を取り上げている。その中で、⑦はリターンの角度について記しているが、「守備の際にはできる限り狭くし、一方、攻撃の際にはできる限り広くするように心掛けるべきだ。」と述べている。また、その原理として「リターンの角度を狭くする」「センターへのサーブ」「サイド・ラインへのサーブ」「中央の守備位置」「極端な位置を占める際に陥りやすい失敗」及び「角度の変化」が示されている。このように、著者は自らの経験に基づいた多角的視点から、攻撃ならびに守備の戦術について、初心者でも理解しやすいように図や写真を用いて説明している。そのため、初心者が戦術を学ぶうえで参考になることが大いにあると考えられる。

ダウニイ（1990, pp. 104-124）は、第7章で3つの基礎的なムーブについて記している。ここでは、それを中心に述べていく。シングルスにおいては、試合中の各ラリーの全てにわたって、スコアリング・ヒットのできるシチュエーションをつくり出そうと努めることになる。そのために3つのムーブが必要だと記している。それは、すなわち①リアコートへシャトルを打つ——クリアあるいはロブを使って、相手の頭上を越えて、相手コートのいずれかのサイドに落とす。②フォアコートへシャトルを打つ——ドロップショットかネットショットを使って。③ミッドコートの両サイドあるいはセンターへシャトルを打ち下ろす——スマッシュを使って。の3つであるが、そのように打つための基礎的ストロークに必要なものは、「ハイ・サーブ、ロー・サーブ；オーバーヘッド・クリア、ドロップそしてスマッシュ；スマッシュに対するブロック、ロブ、プッシュ；フォアコートにおけ

るロブあるいはネット・リプライである。」と述べている。もう1つ重要なのは、サーブ・ムーブについてである。基礎的なサーブ・ムーブにはハイ・サーブとロー・サーブがある。前者に備えてレシーバーは「バックワード・アタッキング・スタンス」をとって、ミッドコートに構えることになる。一方、後者に備えるためレシーバーは「フォアワード・アタッキング・スタンス」をとり、フォアコートへのどんな球種に対しても攻撃できるように準備しておく必要がある。さらに、基礎的なスタンスについての考え方から、プレーヤーが守るべき一般的な留意事項を5点挙げているが、それらの紹介は省略する。これらのことから、シングルスにおいてはスコアリング・ヒットのできるシチュエーションをつくり出すための「3つの基礎的ムーブ」が必要なことが分かった。

飯野ら(2003, 51-58)は、シングルスの戦法について解説している。それによると、試合では「相手の特徴を把握し、弱点を攻める」「いろいろなショットを打つことによって、次にどのショットを打つのか相手に予測しづらくさせる」「動くスピードに緩急をつけ、シャトルを打つテンポやショットに変化をつける」「相手の脚を瞬間止め、反応時間を遅らせることによって、相手の返球コースやショットが予測できる。その結果、次にプレッシャーを与えるショットが打ちやすくなる」「相手の返球コースや返球ショットを制限するショットを打ち、次でさらにプレッシャーを与えるショットを打つ」「相手がショットを打ったエリアへ2度、3度と繰り返し打つ」「慣れていないコースへ打ちエラーを誘う」ことが、勝利への道に繋がると示唆しているように思われる。

## (2) 戦術(戦法)に関わる留意点など

ジャクソンとスオン(1957, p. 175)は、<べからず集>で12点挙げている。その中で主要なものとしては、①自分の計略を相手に悟られないようにする。②相手の試合ペースに乗らないようにする。③ラリー中は足の裏全体を床に着けない。④ラリー中はシャトルから目を離さないようにする、が挙げられる。ここでは、精神的・心理的な面も強靱にしておくことの重要性を説いていると考えられる。

伊藤ら(1964, pp. 98-100)は、シングルスの作戦として、相手を5つの箇所動かすのがシングルスのゲームだと述べている。5つの箇所とは、コートの四隅と相手の身体である。すなわち、相手をいずれかの隅に動かせば隙間ができるので、そこを攻めるのが常道である。また、身体を狙った強打は処理が難しいため弱点となることもある。など、シングルスにおける攻撃の一般的原則を示している。これらの原則は、初級レベルのプレーヤーを対象とするのであれば、現在でも十分に通用すると考えられる。

ダビドソンとグスタフソン(1965, pp. 77-86)は、第1部初級バドミントンの「基本的作戦」の項で、シングルスの要点を次のように述べている。「相手を走らせ、シャトルをこちらのミッド・コートあたりに短く打ちかえさせて、それをスマッシュによって適当な位置に打ち下ろし、ポイントする」「調子のよいラリーをスタートするためには、まず、ハイ・サーブを深く、即ちシャトルがベース・ラインの上あたりから急に落下するように打つこと」「クリアを打つ時には、深く打つことに注意し、ドロップ・ショットを打つ場合には、

シャトルをネット近くで急角度で下降させ、相手方のショート・サービス・ラインの十分前に落下するように打つこと」「相手を多く走らせようと思えば、コート上の4つのコーナーを使用する」そして、「深いバックハンドのコーナーがしばしば弱点であることを記憶すべきである」などは、現在でも初級レベルの指導においても適用可能な基本原則を示している。

ダウニイ (1990, pp. 12-22) は、第1章ゲームの構造において、「戦術と攻撃原則」について記している。それによれば、戦術は「ゲームの最も重要な部分であり、ゲームに意味を与えるものである」が「ゲームの中で、ストローク、身のこなし、体力、プレーヤーの態度などと同じような働きをするものではない」。それらは、「形のあるものとして見ることはできないが、考えの基本となるもので、プレーヤーがゲーム中にコート上で行うどんなことにも意味を与えるものであり、戦術以外の全てのものがどのような範囲で用いられ、相互に関係するかを決める」と述べている。また攻撃原則は、「常にスコアリング・ブロー (\*決め球になる一撃) をなすことのできるシチュエーション (状況) を作り出すようにトライせよ」と述べている。そして、攻撃原則は「バドミントンを攻撃的なゲームとして展開する際の最も重要な原則であり、一般的な戦略 (ストラテジー)、つまりある戦術を用いるための理論的根拠を提供してくれるものだ」と記している。もう1つ大事な用語として「ストローク・ムーブ」が挙げられている。「もし戦術がゲーム中のムーブ (\*将棋などでいう指し手に相当するもの) だとすると、ストロークはムーブをなすための手段になる。もしプレーヤーがゲーム中に攻撃原則を適用するなら、その時ストロークは単にストロークで終わらずに、ストローク・ムーブ (\*将棋の例でいえば、さしずめ指し手を考えたストローク) になる」と述べている。このように、彼はゲーム構造をムーブとシチュエーションの関係性から理論的・科学的な手法を用いて説明していると考えられる。

飯野ら (2003, p. 50) は、バドミントンの戦法を「対戦相手にプレッシャーを与えるショットを打ちエラーをさせるように仕向ける方法と、対戦相手からプレッシャーを与えられた場合に対応する方法」と定義している。例えば、中級レベル以上の選手に対する戦法は、「対戦相手に断続的もしくは継続的に厳しいショットを打ちプレッシャーを与えると、力みや焦りが生じた対戦相手は、次からプレッシャーを与えられないように、①サイドライン際を無理に狙う。②スマッシュやクリアーなどでプレッシャーを与えると相手のバックバウンダリーラインいっぱいに戻球しようとする。③ネット際を無理に狙う。④単発勝負に出る。などして、エラーが発生しやすい心理状態になる」と記している。このような心理的なプレッシャーは対戦者双方に生じ、ショットミスによって自滅したほうがゲームを失う可能性が高いと推測される。

## 2. ダブルスに関して

### (1) 戦術 (戦法) の基本的なフォーメーションまたはシステム

ジャクソンとスオン (1957, pp. 153-159) は、4つの戦法 (フォーメーション) について

紹介している。それによれば、①サイド・バイ・サイド戦法は、味方のコートをはぼ2等分に分けて受け持ち区域とするものである。②前後衛戦法は、混合ダブルスの場合ごく一般的に用いられ、2人の受け持ち区域がきわめてはっきりしている所が特徴。女子が前衛で男子が後衛となる。③ダイアゴナル戦法は、①の戦法と②の戦法とを組み合わせたもので、サーバー若しくはレシーバーがゲーム開始のサービスにすぐ引き続きネット際に接近した場合に用いる。④ローテーション戦法は、試合中2人のプレーヤーが互いに自陣内を巡りながら戦いを進めるものである。また、伊藤ら（1964, pp. 121-131）は①サイド・バイ・サイドの陣型②トップ・アンド・バックの陣型③ダイアゴナルの陣型④ローテーションの陣型を示し、一方のダビドソンとグスタフソン（1965, pp. 162-164）は①サイド・システム②フロント・アンド・バック（前後式）③ダイアゴナル（対角線式）④ローテーション（回転式）を挙げている。さらに、ダウニイ（1990, pp. 48-60）も攻撃のフォーメーションとして、フロント・アンド・バック・アタック・フォーメーション（チャンネル・アタック・フォーメーションを含む）とサイド・アタック・フォーメーション、守備のフォーメーションとして、サイド・ディフェンス・フォーメーション（サイド・バイ・サイドを含む）とダイアゴナル・ディフェンス・フォーメーションを挙げている。これらの名称は異なる部分もあるが、戦法の陣型と攻守の原則についてはほとんど現在まで変わっていないと考えられる。

#### （2）戦術（戦法）に関わる留意点など

ジャクソンとスオン（1957, pp. 160-161）は第9章ダブルスのチームワークの項で、試合前の「打ち合わせ事項」として、次の5つを挙げている。①サービスをレシーバーがショート・リターンしてきたらペアのどちらがカバーするか。②サービス直後にネット際をカバーするのはどちらか。③オーバーヘッド・フライト及びコート中央付近に低めのドライブがきたらリターンをどちらが受け持つか。④パートナーがスマッシュ・リターンをした場合のネット際をカバーするのは誰か。⑤左利きと右利きとのペアの場合、前記4点以外にも詳しく打ち合わせること。また、「チームワーク覚え書き」には13点が挙げられている。そのうち、前衛は試合中ネットに近づきすぎないようにする。並びに、前衛が後衛の守備地域にまで後退しないことを挙げているが、これは混合ダブルスの場合だと述べている。

伊藤ら（1964, pp. 100-131）はダブルスの作戦として、相手を左右前後に動かしてミスを誘い、相手がネット付近でポップ・アップするか、短く浅いフライトを打つように追い込む。また、ダブルスの陣型の打ち合わせとして、以下の5つを挙げている。①味方のサービスを相手がショート・リターンしたら、どちらが前進してカバーするか。②コート中央付近に低めに飛んできたドリブン・クリアやドライブのリターンをどちらが受け持つか。③サービス直後のサーバーの頭上後方を急襲してくるドリブン・クリアをどちらが打ち返すか。④1人がスマッシュした際に、打った本人がネット際に出て相手のショート・リターンをカバーするか、あるいはもう1人のほうが出ていくか。⑤その他、左利きのプレー

ヤーを交えた場合など、と示している。これらの打ち合わせ事項は、普段の練習によって獲得されるものであり、確認しておきたいコンビネーションと考えられる。

ダビドソンとグスタフソン（1965, pp. 192-196, 212-232）は、ダブルスの守備の戦法として、①攻撃側のチーム・ワークを研究する。②攻撃の打破を挙げている。①では守備の際、プレーヤーは常に陣地内にシャトルがスマッシュされることを予期して警戒するように説いている。②では得点に結びつくような無防備な空間がない場合、再びクリアを返して、相手に打ち下ろし続けさせるよりも、むしろ相手ペアの1人に打ち上げるようなショットを行うように説いている。また、混合ダブルスにおけるサーブの戦法では、ロー・サーブや強く打つハイ・サーブ以外に多様なサーブを考えて打つように勧めている。さらに、チームの協力としては、パートナーの意志が完全に調和を保って働き得るようにすることが必要だと結んでいる。本書は初級者向けと上級者向けの技術と戦術について、多くのページ数を割いている。原著の初版本は1953年に刊行されている。近代バドミントンが米国経由で日本に移入されたことを推し量れば、前述の『バドミントン入門』（\*初版本は1939年刊）とともに、以後の日本バドミントン界発展の基礎をつくった名著だといえる。そのため、近代バドミントンの初期における技術や戦術を学ぶうえで欠かせない史料だと考えられる。

ダウニィ（1990, pp. 10-13）はシングルス同様に、第1章でゲームの構造について記している。彼はダブルス・ゲームの構造を分析し、戦術的な「フレームワーク」という概念を用いている。このフレームワークは、「相手に勝つために、どんな戦術を用い、攻撃や守備においてペアの1人としてどのように連携し、機能していくべきかを決定するに役立つ」と述べている。そして、戦術は「プレーヤーの思考をうつし出すばかりでなく、思考のないことをもまたうつし出す。戦術として、他のものではなく、これでなければならぬというものを選択する時には、プレーヤーは、1つの基本的な原則、つまり攻撃原則（常に、決め球を打てるような局面をつくり出すように努める！）をとるべきだ。」と述べ、そのゲーム中の局面を簡単に識別するために、コートリアコート（RC）、ミッドコート（MC）、フォアコート（FC）の主要な区域に分けている。またダブルスの場合、「戦術の選択は、プレーヤーの技能の程度ならびに体力や態度に関わるものである」から、「ペアは攻撃原則に従って採用した戦術を実行に移す能力の持ち主でなければならない。」と説いている。このように本書は、チャート形式でフレームワークが示されているところに特徴があると思われる。なお、チャートとは「ゲームの中で進行する全てのことを1つの表」にまとめたものである。

飯野ら（2003, pp. 58-66）は、ダブルスの基礎知識として「フォーメーションの名称」「ダブルスの原則」「ダブルスの心理」を記している。その後、ダブルスの戦法として、まず「対戦相手の特徴を把握し、弱点を攻める」と「いろいろなショットを打つことによって、次にどのショットを打つのか対戦相手に予測しづらくさせる」を挙げ、パターン練習もできるようにモデルケースを記している。次に、「対戦相手の脚を止め、反応時間を遅らせるこ

とによって、相手の返球コースやショットを予測する」を挙げている。これは若干体勢に余裕がある場合、意図的にインパクトのタイミングを遅らせることで可能となるだろう。さらに、「後衛のアタックで返球コースを制限し前衛が決める、もしくは、プレッシャーを与えるショットを打つ」「後衛がフォーメーションの弱点を突き、甘い返球をさせる」「スマッシュレシーブから攻撃に移る」「中間地点からドライブを打ちプレッシャーを与える」「つなぐ球を工夫して、次のショットでプレッシャーを与える」「左利き選手と右利き選手が組んだ場合の攻撃パターンモデル」について、詳細な図解を示している。これらはゲームにおける1場面（ラリー）を抽出したパターンといえる。ダブルスは、4名のプレーヤーの技能が最大限に発揮されると最高のゲームになるだろう。勝つための戦術は、対戦相手によって変わってくる。ゲームから抽出された様々なパターン練習を行い、それらを習得して試合で応用できるようにすることが大切だと考えられる。

## V おわりに

本研究の目的は、教科体育における教材開発とバドミントンの初心者指導に関わる基礎的資料を得ることであった。そのため本稿では、国際バドミントン連盟（IBF）が設立された1934年以降の文献をもとにして、バドミントンの競技規則の改訂とそれに密接な関連があると考えられる技術と戦術の変遷に視点をあてて検討した。結果の一部を示すと、以下のようになる。

- 1) IBFが1939年に改訂した『Laws of Badminton』には、全21条と新たに注釈が4項目記載されていた。それは、IBFが設立された1934年に制定された『Laws of Badminton』をさらに検討したもので、現在のルールの基盤となっている。
- 2) バドミントンの技術は、基礎技術と応用技術並びに試合技術に大別できる。なかでも、近代バドミントンが成立してから受け継がれてきた‘攻撃的でない’アンダーハンド・サービスは、伝承しなければならない技術といえる。
- 3) ダブルスの戦術としての4つのフォーメーション (sides, front and back, diagonal, rotation) は、1950年代の文献で紹介されていた。

今後は、バドミントンの技術と戦術に関する膨大な史料について、さらに時間をかけて検討と分析を行い、教科体育の教材開発や初心者指導に活かせる資料を提供していきたい。

## 謝辞

本研究の執筆にあたり、新潟大学の牛山幸彦教授及び大庭昌昭准教授並びに雲尾周准教授から子細な助言をいただいた。また、日本体育大学の古川暁也教授並びに長岡技術科学大学の塩野谷明教授からも助言をいただいた。あらためて深謝申し上げます。

## 付記

本研究の一部は、筆者らが日本コーチング学会第 25 回大会においてポスター発表した。

## 注

1) K. マイネル (1982, p. 9) は、「言語が単に自分や他人の労働の運動をよく考えて把握したり、人から人へと経験を交換し合ったりするのを可能にするだけでなく、世代から世代へと運動経験を保存し伝達するものである。特別な操作法、むずかしく新しい運動技能、特有な作業技術、道具使用の規則や指針など、現在に至るまで、言語の助けを借りて、親から子へ、師匠から弟子へと伝承されてきた。」と述べている。

## 文献

- ABA (1963) ABA OFFICIAL RULES. The Laws of Badminton, IBF revised in 1963, pp. 4-11.
- 阿部秀夫 (1986) ザ・バドミントン初心者のための基本テクニックと練習法, 日本文芸社 : 東京, pp. 14-19.
- 阿部一佳 (1984) バドミントン入門, 浅見俊雄他編, 現代体育・スポーツ大系第 27 巻テニス, 卓球, バドミントン. 講談社 : 東京, p. 218.
- 阿部一佳 (1984) 学校体育バドミントン①大学, 浅見俊雄他編, 現代体育・スポーツ大系第 27 巻テニス, 卓球, バドミントン. 講談社 : 東京, pp. 277-285.
- 阿部一佳 (1987) 最新 スポーツ大事典. 日本体育協会監修 岸野雄三編. 大修館書店 : 東京, pp. 994-1004.
- 阿部一佳・岡本進 (1985) バドミントン. 大石三四郎・浅田隆夫編, ぎょうせい : 東京, pp. 23-24.
- 阿部一佳・渡辺雅弘 (1985) 基本レッスン バドミントン, 大修館書店 : 東京, pp. 18-29.
- 阿部一佳・渡辺雅弘 (2008) バドミントンの指導理論 1, 第 2 版, 日本バドミントン指導者連盟 : 埼玉, pp. 47-50.
- 相沢マチ子 (1983) やさしいバドミントン・レッスン, ベースポール・マガジン社 : 東京, pp. 11-14.
- 蘭 和真 (2010) バドミントンの初期の歴史に関する一考察. 東海学院大学紀要 4:11-17.
- BAE (1939) BAE Handbook 1939-1940. The Laws of Badminton, IBF revised in 1939, pp. 53-67.
- BAE (1950) BAE Handbook 1950-1950. The Laws of Badminton, IBF revised in 1949, pp. 76-84.
- BAE (1954) BAE Recommendations to Umpires. The Laws of Badminton, IBF revised in 1949, 1952, pp. 7-16.
- Brahms, B. V. (2010) Badminton handbook training・tactics・competition. Meyer&Meyer Sport: Maidenhead, U. K., pp. 21-23, p. 128.



- カール・H・ジャクソン, レスター・A・スオン : 今井先監訳 (1957) バドミントン入門. ベースボール・マガジン社 : 東京, pp. 63-108, 153-159, 160-161, 169-175.
- 中国ジュニア「バドミントン」訓練教材編集チーム : 中野千穂訳 (1988) 中国バドミントン強さの秘密. ベースボール・マガジン社 : 東京, pp. 60-61.
- Davidson, Kenneth R. and Gustavson, Lealand R. (1964) *Winning badminton* (Rev. print) . Ronald Press Co. : USA, pp. 11-14, p. 38.
- Donald C. Paup and Bo Fernhall (2000) *Skills, Drills & Strategies for Badminton*. Holcomb Hathaway : USA, pp. 17-21.
- Eckart Meyners (1983) *Badminton in der Schule*. Verlag Karl Hofmann: Schrndorf, pp. 83-86.
- Edward, Brown (1971) *Badminton*. Faber&Faber : London, pp. 23-26.
- Edwards, John (1997) *Badminton: Technique, Tactics, Training*. The Crowood Press Ltd : UK, pp. 19-22.
- 花岡牧夫 (1982) 図解バドミントン. 日東書院 : 東京, pp. 24-27.
- 平川卓弘・胡 小藝 (1994) バドミントンのすすめ. ベースボール・マガジン社 : 東京, pp. 25-27.
- 平川卓弘 (2004) ジュニア選手の練習方法. バドミントン教本 ジュニア編, 日本バドミントン協会編. 大修館書店 : 東京, pp. 14-79.
- 廣田 彰・飯野佳孝 (1994) 目で見えるバドミントンの技術とトレーニング. 大修館書店 : 東京, pp. 38-39.
- History of The LAWS of Badminton (2015)  
<http://www.worldbadminton.com/rules/history.htm> (参照日 2015年6月21日)
- 兵藤昌彦 (1972) バドミントンの技術史, スポーツの技術史. 岸野雄三・多和健雄編, 3版. 大修館書店 : 東京, pp. 624-635.
- 飯野佳孝 (2001) バドミントンの技術. バドミントン教本 基本編. 日本バドミントン協会編, ベースボール・マガジン社 : 東京, pp. 17-20.
- 飯野佳孝・神谷ジャーミン・中島 慶 (2003) バドミントン教本 応用編. 日本バドミントン協会編, ベースボール・マガジン社 : 東京, pp. 50-66.
- 池田昌道 (1984) ザ・ベストバドミントン. 大修館書店 : 東京, pp. 25-30.
- 池田信太郎 (2011) バドミントンの基本レッスン. 新星出版社 : 東京, pp. 13-15.
- IBF (2006) *The IBF Laws of Badminton*.
- 伊藤基記・相馬武美・菊地利明・今井 先 (1964) バドミントン教本 (栗本義彦監修) . 不味堂出版 : 東京, pp. 42-46, 93-131.
- 伊藤基記 (1969) バドミントン上達法. 7版, 不味堂書店 : 東京, pp. 18-24. pp. 117-120.
- Jake Downey (1978) *Badminton for Schools*. Pelham Books Ltd : London, pp. 33-39.
- Jake Downey (1990) *How to coach BADMINTON*. William Collins Sons & Co Ltd :

- London, pp. 46-49.
- ジェーク・ダウニィ：阿部一佳ほか訳（1990）ウィニング・バドミントン・シングルス. 大修館書店：東京, pp. 12-22, 104-124.
- ジェーク・ダウニィ：阿部一佳ほか訳（1990）ウィニング・バドミントン・ダブルス. 大修館書店：東京, pp. 10-13, 48-60.
- J. P. パレット：川畑有美稲・谷一郎訳（1928）庭球原理. 實業之日本社：東京, p. 30-31.
- Judy Hashman and C. M. Jones（1977）Starting Badminton. Littlehampton Book service Ltd:London, pp. 11-15.
- K. R. ダビドソン, L. R. グスタフソン：兵藤昌彦訳（1965）ウィニング・バドミントン. 3 版, 不昧堂出版:東京, pp. 77-86, 123-164, 192-196, 212-232.
- ケン・クロスリー：後藤忠弘訳（1973）バドミントン競技入門. ベースボール・マガジン社：東京, pp. 20-26.
- 岸 一弘（2010）バドミントンを知る本. 上毛新聞社事業局出版部：群馬, pp. 10-16.
- 小島一平（1980）バドミントン. 西東社：東京, pp. 36-37.
- クルト・マイネル：金子明友訳（1982）スポーツ運動学. 再版. 大修館書店：東京, p. 9. pp, 31-58.
- 日本テニス協会編（1998）テニス指導教本. 大修館書店：東京, p. 54.
- 織田秀実・堀内四郎・松平頼暁・山岸宏・天笠準平（1976）生物学<生命を考える>. 開成出版：東京, pp. pp. 239-240.
- 大世古吉弘（1988）バドミントン上達プログラム. ベースボール・マガジン社：東京, p. 19.
- Pat Davis（1976）The Badminton Coach. Kaye&Ward：London, pp. 44-45.
- 彭美丽・張蜀璇・甘学琳・胡彦峰（2001）羽毛球技巧図解. 北京体育大学出版社：北京, pp. 3-6.
- 拉尔夫・法彼西・卡尔一海恩思・奥林斯基・马丁・斯柯罗茨：花勇民・葛艳芳訳（2008）羽毛球 从入门到实战. 北京体育大学出版社：北京, pp. 20-22.
- 堺 栄一（1982）バドミントン. 講談社：東京, pp. 18-20.
- 関 一誠（1979）バドミントン 強くなるための基本技術&戦法. ナツメ社：東京, pp. 46-48.
- 関 一誠・藤田明男・蘭 和真（1989）バドミントン教室. 大修館書店：東京, pp. 36-38.
- 関根義雄・平川卓弘（1986）バドミントン練習プログラム. 成美堂出版：東京, pp. 10-11.
- 田郷弘毅（1984）学校体育バドミントン③小学校. 浅見俊雄編, 現代体育・スポーツ体系第 27 巻テニス, 卓球, バドミントン, 講談社：東京, pp. 291-293.
- 高橋英夫・今井正男（2002）J U D G E RULES OF BADMINTON バドミントン教本. 日本バドミントン協会編. 日本バドミントン協会：東京, pp. 168-169, pp. 183-186.
- 梅野尾昌一（1984）バドミントン これからのバドミントンを志す人のために. 日本文芸社：東京, pp. 16-18.
- Tony Grice（1996）BADMINTON Step to Success. Human Kinetics：USA, pp. 7-8.

Tony Grice (2008) *Badminton Step to Success*. 2nd, Human Kinetics : USA, pp. 1-3.

角田真一郎 (1975) *バドミントン*. 日東書院 : 東京, pp. 46-51.

舛田圭太 (2011) *基本が身につく バドミントン練習メニュー200*. 池田書店 : 東京, pp. 22-24.

銭谷欽治 (1987) *バドミントン*. 西東社 : 東京, pp. 18-21.

銭谷欽治 (1990) *バドミントン上達法*. ベースボール・マガジン社 : 東京, pp. 10-12.

ウエンブレバドミントンチーム (2009) *もっとうまくなる！バドミントン*. ナツメ社 : 東京, pp. 14-17.

肖杰・刘萍萍・刘勉 (2008) *羽毛球*. 江苏科学技术出版社 : 南京, pp. 17-26.

### Abstract

## **Fundamental Study About Revision of the Rules of Badminton, and Transition of Techniques and Tactics**

Kazuhiro KISHI

The purpose of this study is to obtain basic data in connection with teaching beginners badminton and developing teaching-materials in physical education.

This paper describes an outline of revision of the rules, changes in technique and tactics based on the literature in and after 1934 when International Badminton Federation (IBF) was founded. In "The Laws of Badminton", revised by the IBF in 1939, interpretations of four items were newly added together with the 21 articles. It follows "The Laws of Badminton" enacted in 1934, and serves as a base of the present rule.

Badminton technique can be divided into three types: basic, applied and game techniques. Especially, the "not offensive" underhand service inherited after modern badminton is a technique which must be handed down. Four formation (sides, front and back, diagonal, rotation) was introduced by documents of the 1950s as a tactics effective in a doubles match.

I would like to continue making a detailed analysis about the technique and tactics of badminton by collecting and reviewing more literature.